「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：成人保健看護

報告者：宮城　裕子

教育及び実践の課題

成人保健看護では、慢性疾患や生活習慣病をもつ対象のセルフケア支援と看護の役割について、講義の他に 2 年次の「成人保健看護実習I」、3 年次の「成人保健看護演習・実習II」の演習や臨床実習の学習が含まれる。慢性疾患患者への患者教育においては、看護職者の患者への関心の寄せ方や対応が患者に与える影響は少なくなく、その対応には看護職者の価値観や考え方が反映する。病気と共存する患者のその体験や経験をありのまま捉え、患者がその意味を考えていくことが大切にされなければならない。それを可能にするのが看護職者の行うケアリングであり、ケアリングは人を癒やし人を成長に導くこともできると言われている。医療環境において高度な技術化や経済制度が増加する中、看護学生がケアリング特性を育み発展させるための役割は以前に比べ重要なものとなっていることが言われている。

活用した論文の概要

Loke らは、シンガポールの看護教育機関に在籍する看護学生（1 年生、4 年生）、看護教員および研修に参加した臨床看護師を対象に、ケアリング行動について、Watoson Transpersonal Caring 理論に基づき Wolf によって作成された Caring Behavior Inventory tool(CBI)の 42 項目を用いて評価を行っている。その結果、1 年生および 4 年生共に CBI の平均点は高かったが、学年が上がるにつれて得点は低下していた。1 年次の学生は看護教員の結果に類似し、4 年生の学生は臨床看護師の得点と類似していた。学年が進むにつれ患者の人格を尊重したケアの要素は高くなるがケアリング行動の得点は低下していることについて、手段的ケアリングに関する役割や責任が増え、より複雑なものになっていくことに対処しようとする結果が理由の 1 つであると述べている。

教育及び実践への活用

ケアリングは抽象度の高い概念であり、実践や能力を高める教育方法について具体的に示したものはほとんどみられないが、ケアリング行動項目で用いられる関連用語をより多く取り入れていくことによって、学生がその用語に慣れ親しみ、何となく行っているケアではなくケアリングを定義づけられたものとして学んでいく機会になるとWatsonは述べている。教員が勉強会等でケアリングについての理解を深め、講義や指導の中でどのように取り入れられるかについて考えていくことを継続していく必要がある。3年次の成人保健看護の慢性疾患をもつ患者の教育支援方法演習において、患者支援が知識の情報提供のみではなく、ロールプレイング等の体験を通して「人間性の尊重」「専門的な知識と技術の提供」について考えるディスカッションを取り入れる。また成人保健看護Ⅱの講義や実習Ⅱ、実習Ⅰでの経験から、学生がケアリング行動項目にある視点でも学ぶことができる指導について、今後教員の理解も深めていく必要がある。

参考文献

Jennifer C.F.Loke, Kah Wai Lee, et al.（2015）. Caring behaviors of student nurses: Effects of pre-registration nursing education. Nurse Education in practice, 15, 421-429.